

尿中Naと食事中Naの母と子の関係と味覚感度(その2)

—食生活の家族関係の研究—

東筑紫短大 納身節子 ○田代桂子 大下美津枝

目的 前報 で尿・食事中Naと試験紙による味覚テストの塩味正答数では、性差による影響があることを認めた。今回は、母子について、尿・食事中Na量の関係及び味覚感度との関係、年代差の検討を行ったので報告する。

方法 a) 対象 その1の対象より無作為抽出された母と子(女子学生)16組

平均年齢(才) 母 46.1 ± 2.7 子 18.3 ± 0.5 平均体重(kg) 母 53.9 ± 5.6 子 52.1 ± 5.0

平均身長(cm) 母 154.7 ± 3.4 子 157.9 ± 5.2 平均尿量(ml) 母 995 ± 262 子 869 ± 262

平均体表面積(m^2) 母 1.48 ± 0.08 子 1.46 ± 0.09

b) 時期 昭和57年7月下旬

c) 内容 ①尿中塩分測定 24時間尿を採取し食塩濃度計及び蛍光光度計にて測定

②はクロライドメーター フレアチンはJaffé法により測定

③食事中塩分量 その1による食事調査成績

④味覚テスト その1と同様の10枚の試験紙により行った。

結果 a) 全く独立に定量した尿中Naと②の間に、母と子各々に高い相関が得られ、Na測定値の信頼性の高いことが認められた。

b) 食塩濃度計のNaCl量(平均値母 $9.2 \pm 2.6g$, 子 $7.5 \pm 2.1g$)と蛍光光度計のNaCl相当量(母 $9.5 \pm 2.6g$, 子 $7.7 \pm 2.2g$)の間に母と子各々に相関が認められた。

c) 尿中Na測定値について、母子相関が認められた。

d) 尿中Na測定値と味覚テスト塩味正答数の間には相関は認められなかった。